

2014年度 関東甲信越英語教育学会
中学生の英語学習実態に関する
インタビュー分析
—質的分析手法の TAE を用いて—

ARCLE 研究会

【ベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究】

酒井英樹(信州大学)

工藤洋路(駒沢女子大学)

加藤由美子(ベネッセ教育総合研究所)

福本優美子(ベネッセ教育総合研究所)

要綱集 p. 66

- 研究会としての発表

- 1次分析、TAE の分析発表(中学生A・B、高校生A・B)、ワークショップ
- 上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム2013 (2013.12.1)
- 「これからの中学校・高校での英語の指導と学びを考えるー全国の高校入試分析と中高生の英語学習実態をもとにー」
- 酒井・工藤・高木・加藤・福本

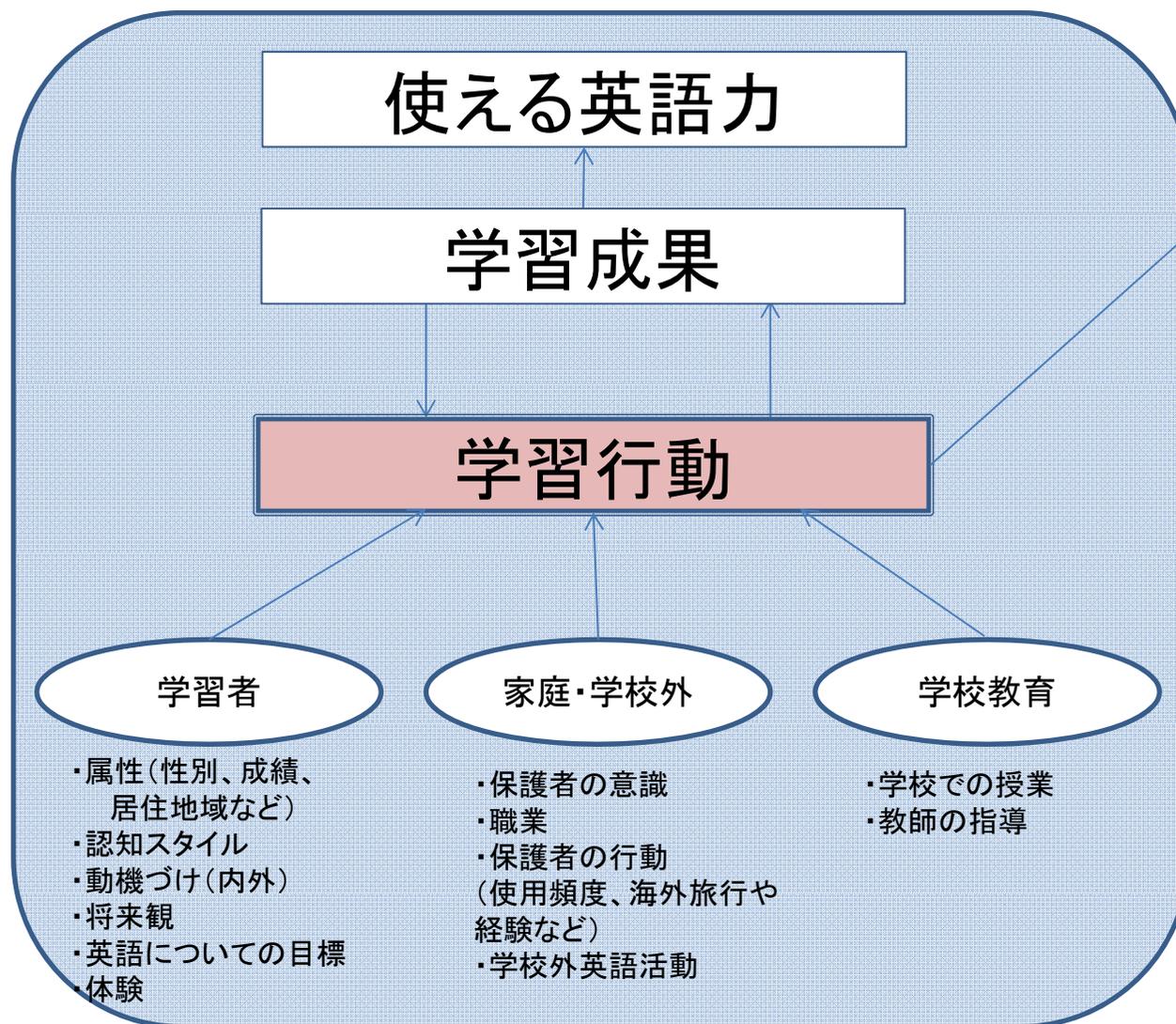
- 学会での発表

- 方法論の検討(中学生Aの分析の手順を例に挙げて)
 - 「質的研究法としてのThinking at the Edge (TAE)ー学習者へのインタビュー分析を例に挙げてー」
 - 中部地区英語教育学会 (2014.6.22)
 - 高木・酒井
- 高校生Aと高校生Bの分析結果
 - 「高校生の英語学習実態から考える指導と学びーインタビューを手がかりにしてー」
 - 全国英語教育学会 (2014.8.10)
 - 高木・加藤・福本・工藤・酒井
- 中学生Aと中学生Bの分析結果
 - 「中学生の英語学習実態に関するインタビュー分析ー質的分析手法の TAE を用いてー」
 - 関東甲信越英語教育学会 (2014.8.24)
 - 酒井・工藤・加藤・福本

中高生の英語学習実態把握研究: 研究の枠組み

●研究観点

中高生の学習実態を把握することにより、学習者や英語教育の課題を明らかにし、使える英語を身につけるための学習体系を提案する。



学習行動を把握する
(学習行動の有無、
意識／無意識化)

★学習行動

- ・学校の予復習／宿題
- ・学校外学習の予復習／宿題
- ・自己学習(趣味含む)

**【学習者視点への
こだわり】**

→教育者や研究者の
視点からだけではなく、
**子どもの実態・声から
考える。**

課題認識

【第1回中学校英語に関する基本調査】 調査時期2009年1～2月、調査対象中2生2,967名

英語学習でつまずきやすいポイント

(%)

英語に対する認識別

得意	得意	苦手	苦手
好き	嫌い	好き	嫌い
(n=630)	(n=484)	(n=122)	(n=1,711)

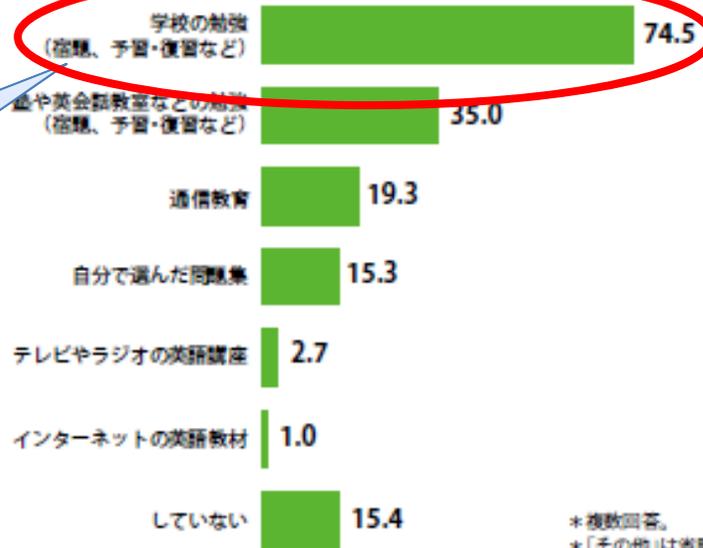


子どもたちにとってなぜそんなに文法の比重が大きいのか。

「文法が難しい」の「文法」とは何のことを指しているのか？子どもによっても違うのでは？

「学校外での英語学習」で7割以上を占める「学校の勉強」とは、具体的に何をどんな風にやっているのか。

図3-3 学校外での英語学習の種類(家庭学習) (%)



*複数回答。
*「その他」は省略。

量的調査では捉えきれなかった詳細な部分をより具体的に、深く明らかにしたい。
量的データをより立体的に捉えたい。

ヒアリングの目的

- 英語学習の実態把握（学校の授業、予習、復習、学校外学習、自己学習など）
- 英語学習および英語指導に関する課題把握

中高生ヒアリング概要

対象	●学年・人数：中学2年生8名、高校2年生8名、合計16名
時期	●2013年7、8月
方法	●時間：1人30～40分 ●実施方法：インタビュアー1名＋サブ1名 インタビュアー：酒井、工藤、加藤、福本 ●半構造化ヒアリング （事前に大まかな質問事項は決めておき、回答によってさらに詳細に聞く） ●事前アンケートも実施
その他	●プレヒアリング実施（ヒアリング内容・方法検討のため） ⇒ 中2生1名＋高3生1名

●伝統的な予習や宿題

- ◆「左に本文、右に和訳」のノートやワークシートをほとんどの生徒が使っている。
- ◆授業中の言語活動と関連していると思われるような学習はほとんど述べられない。
- ◆大学の「英語科教育法」の授業では紹介されないような方法で指導を受けている。

●子どもの意識 「英語ができる」とは→「長文読解力が高い、文法がわかる」こと

- ◆多くが、「話す」「聞く」などは、大学に行ってからやればいい、と考えている。
- ◆英語を実際に使うということを前提とした英語学習観が欠如している。
- ◆話すためには、まずは文法や単語が大切だと強く思っている。

- **学校での勉強が、学校外での学習を規定する割合が大きい。**
 - ◆ 日々の学習は、**学校の予習・宿題、テスト対策**がほとんどである。
 - ◆ 中学生だけでなく高校生も、家庭での学習は授業の予習(本文写し、単語の意味調べ、本文和訳など)や**小テスト対策の勉強**が大部分を占めていると思われる。
- **英語の授業に対する意識**
 - ◆ 中学生は授業をおおむね受け入れている。
 - ◆ 授業の中で行うことに、自分なりにその意義を見出そうとして、納得しながら勉強している生徒もいる。
 - ◆ 高校生の中には、今受けている授業を批判的に捉えている生徒もいる。

●将来観と学習行動・・・「将来英語を使うこと」と「今やっていること」の乖離

◆将来、**英語を使って仕事をしたい**と考えている一人の生徒が、それに向けて今やるべきことは、「**スペリングミス無くすこと**」と答えた。

◆英語を使って仕事をしてみたいと思っても、英単語の練習の際に日本語訳も一緒に書いて覚えていたり、本文を書き写すのに2時間かけていたりする生徒もいる。

●学校外での英語学習を始めたきっかけにはそれぞれのストーリーが見られる。

◆そのエピソードは、必ずしも劇的なものではない。

例) 修学旅行で外国人に道を聞かれた、小さいころ祖母にABCの歌を歌ってもらって興味をもった、など。

- **学校の学びに終始している生徒が多そうだが、それでも、小さな自律の芽もある。**
 - ◆ 同じ予習でも、やり方を自分で考え、**選択して行っている生徒**もいる。
 - ◆ 自らで英語のプレゼンテーションの番組を見たり、洋楽を聴いたり(歌詞の聞き取りを意識したり、歌詞カードを見たり)という学びもある。
- **先生の影響が大きい。先生との関係性が影響している。**
 - ◆ 大部分の生徒は、**先生の指導通りに学習**を行っている。
 - ◆ 先生との良好な関係により、英語に対して積極的に取り組んでいる生徒も多い。
- **保護者の影響も大きい**
 - ◆ 家庭での学びには、**保護者の影響が大きい。**

ヒアリングの第2次分析

対象：**中学生2名**（本研究の分析対象、

内1名は中部地区英語教育学会で発表）

高校生2名（全国英語教育学会で発表）

目的：英語学習行動の背景にある意識は何かを探る。

分析方法：**Thinking at the Edge (TAE)**

分析者：面接者（インタビューをしながら、生徒の表情や声の抑揚など、非言語から感じられた要素も分析に取りこむ）

※生徒と面接者（分析者）の相互関係で意味を構築していく。

TAE (Thinking At the Edge)

* アメリカの哲学者・臨床心理学者である
Gendlinらが開発した理論構築法

「うまく言葉にできてないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を生み出していく系統だった方法(得丸、2010、p.5)

- 得丸(2010)が質的研究に応用
- 14ステップで、次第にシンボル化(言語化、図式化)し、最終的に「漠然とした理解」から「新概念」を生成する。
- 生徒の英語学習の課題、意識、およびインタビュアーの感じたことなどを個々の学習者の文脈で捉える事ができる。

分析過程

Part1 (ステップ1～5)

「フェルトセンスから語る」

明確に言語化できないが漠然と身体的に感じられる感覚を言語化する。

Part2 (ステップ6～9)

「実例からパターンを引き出す」

データから多様な側面を選び出し、パターンとして言い表すとともに、各パターンを相互に交差させ、データから新たに浮かび上がってくる知見を書き留める。

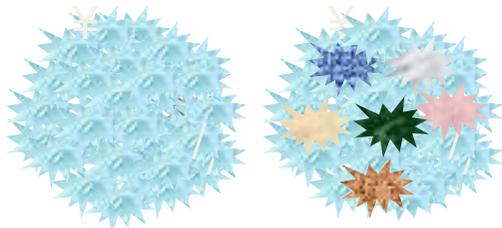
Part3 (ステップ10～14)

「理論を構築する」

これまでのステップを経て、分析者が保持しているフェルトセンスで用語を選出し、概念としていく。

各ステップのイメージ

(本スライドは得丸先生の講義pptより)



(作業) パートⅠ

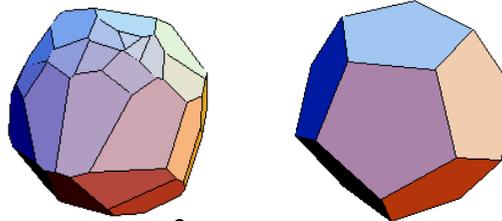
全体をつかむ 1
重要な切片を拾いあげる 3,4
中核をつかむ 5

(結果)

語句の並列と、一文で表す

(使用するシート)

マイセンテンスシート



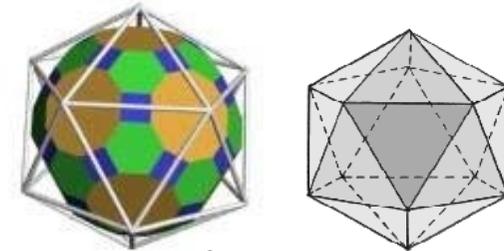
パートⅡ

部分内の細部を検討する 6,7
部分間の関係を見出す 8

複数の文の連立(箇条書)で表す

パターンシート

交差シート



パートⅢ

諸関係の結節点を見出す 10,11
結節点をつなぎ構造を作る 12
(構造を動かす 13,14)

概念構造(理論)で表す

用語関連シート
(1)(2)(3)

英語学習研究 ヒアリング二次分析 (TAE)

①中学生A 中学2年生 男子

②中学生B 中学2年生 女子

中学生A : 英語学習研究 ヒアリング二次分析 (TAE)

フェルトセンス (うまく言葉にできないけれど重要だと感じられる身体感覚*)

選択している。自己決定している。多様な勉強方法を工夫している。聴いたり見たりしていい感じ。素直に受け止めている。ICTを利用している。インタビューのやりとりが気持ちがいい。

パターン

（インタビューから読み取れる、行動や意識、志向などのパターン）

- ①教科書の英語の意味を分かりたいと思っている。
- ②英語を頭に入れたいと思っている。
- ③英語の成績を下げないようにという意識を持って、勉強している。
- ④情意的な、気持ち良さに、英語の学びの価値を見出している。
- ⑤将来の夢と英語の学習がリンクしていないが、今後のために英語を使っていきたいと思っている。
- ⑥英語学習がうまく行かなかった経験を自覚している。
- ⑦日常的に、無理のない範囲で行える、英語に関する活動を取り入れている。
- ⑧他人から言われずに、自分で勉強方法を決めている。
- ⑨ICT 機器を使った英語に関する活動をしている。
- ⑩声に出しながら英語を学んでいる。
- 11 教師の言うことも聞いている。（introjected motivation）

全体の中の 個の確立

遊び、家族の中で
・動画
・Walkman

情的動機づけ
・英語を聞くのが
少し楽しい
・リズム、テンポ
に合わせて、
気分が落ち込んで
るときでも少し
上がってきたりする

英語に触
れること



教室の中で
・ノートの取り方
・提出ノート

意図的に
頭に入れ
ること

成績を下げない
・教科書の英語の
意味がわかる
・単語を覚えたりす
る
・先生の話を入
れる

「あーはい。そこで英語だけ足手まといっていうんですか。なんか、あんまり使わないからいいやって思うんじゃないくて、これからのために考えてまあ、使っていったりしたいとまあ少し思うんで。」

中1

中2

中2秋

「自分で」決める

通信教育

「自分でこのまま1人だけで学校のやつだけやって家であんまりやらないのはなんか、成績とかにもまあ、ちょっと影響しちゃうかなと思っ
て・・・」

「塾行くとなんか、自分の時間があんまり作れなくなる
というか。塾は時間が決まってるから、自分の決める、なんかできる時間でやりたいから。」

ノートの取り方

「文章が右側、単語が左側」

「いや、自分でまあ。まあ、先生が話している時はそれ聞いてしっかり覚えられないといけないから、自分でタイミングを見て書いてます。」

「たまたま教科書が左で、なんか、そっちのが覚えやすいかなと思ったんで。単語を左側に書いてた」

中学生B：英語学習研究 ヒアリング二次分析（TAE）

フェルトセンス（うまく言葉にできないけれど重要だと感じられる身体感覚*）

先生好き。従順な子。問題解くこと大切。人と比べて苦手。自分のことをそこそこ分かっている。ちょっと消極的。量が大切。友だち大切。家庭そこそこ熱心。頑張り屋さん。

パターン（インタビューから読み取れる、行動や意識、志向などのパターン）

- ①英語の勉強の中心は問題を解くことである。
- ②先生のやり方が好き。
- ③英語をたくさん勉強している。
- ④まわりの人からいい影響を受けている。
- ⑤今の勉強方法を肯定的に捉えている。
- ⑥試験で点を取ることが英語の勉強の目標である。
- ⑦自分のスタイルを把握している。

パターン⑤ 今の勉強方法を肯定的に捉えている

Q：受きたい授業は？

A：今のままでいいと思う。

（問題解く速さとかが身につくので、やっぱり入試の時に役立つかなって思う）

Q：ラジオ講座「基礎英語」は？

A：知ってます。たまに聞いたり。

Q：今の勉強とは入れ替えてまでして聞こうとは思わない？

A：はい。

パターン⑥ 試験で点を取ることが英語の勉強の目標である

Q：先生がする質問の内容は？

A：英語の試験とかに出てくる問題だったり、映画の話が出てきて…映画のやつとかはあまり答えないですけど、試験勉強に役立つだろうなって思うところは手を挙げるようにしています。

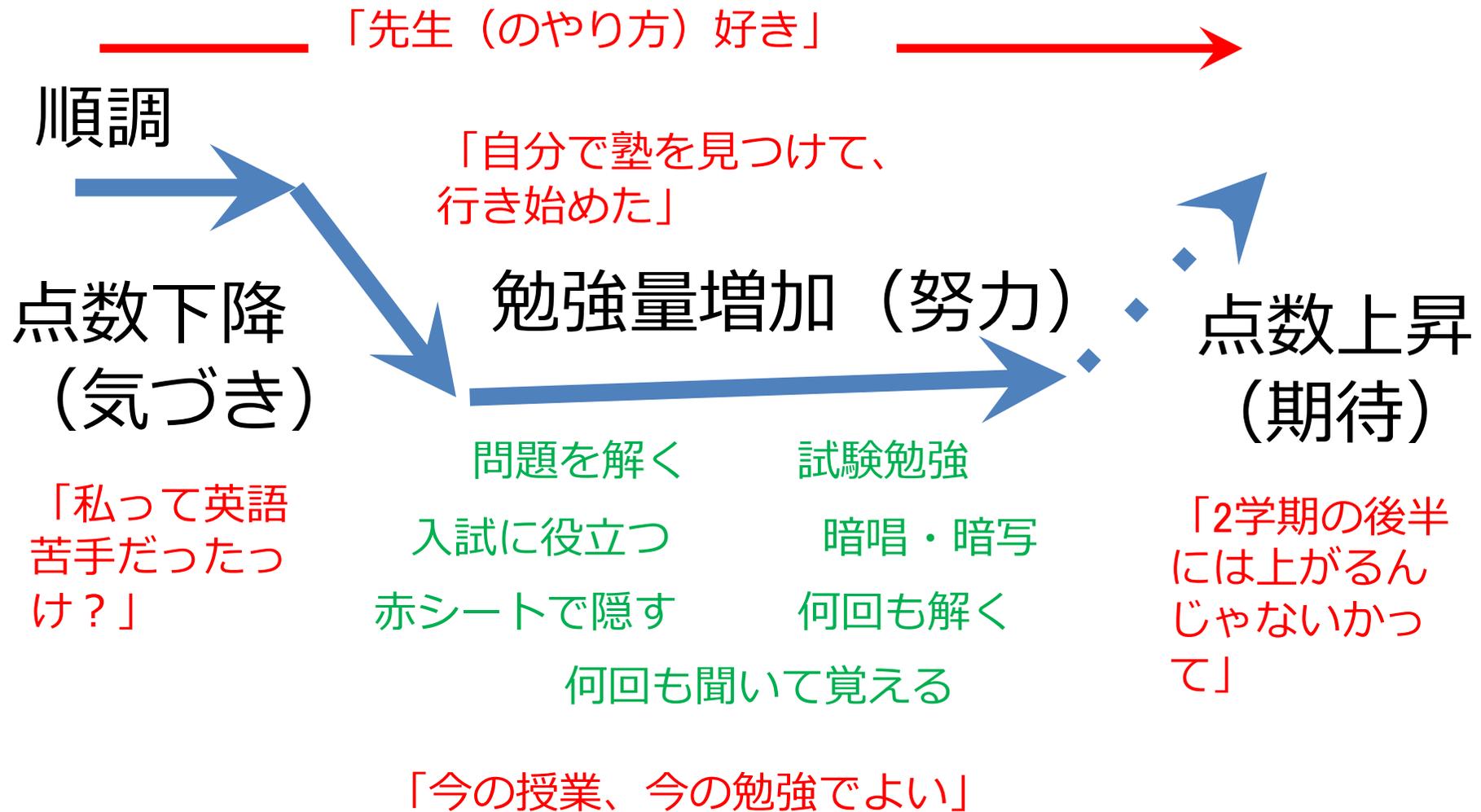
Q：暗唱・暗写でつく力は？

A：期末テストに教科書の本文が丸々出て、それについて抜けてる単語とかを書いたりするので、そのときに暗唱しているとそれを思い出して書いたりできる。

中1秋

中2夏前

中2秋



まとめ

■ 2人の学習者の分析が示唆すること

1. 自律性・・・さまざまなレベルで自己決定している。
(学び方などの)選択のための情報提示はあるのだろうか
2. 英語を使ったコミュニケーション経験と英語学習が分離しているが共存している生徒(中学生A)と、片方のみに価値を置いている生徒(中学生B)がいることが判明した。

■ TAE の研究が示唆すること

1. 量的調査とは異なり、質的研究は対象人数が限られるため、出てきた結果は個別事例であり、一般化できるものではないが、転用可能なものである。
2. 大人数の調査では、全体的な傾向はわかるものの、個々の学習者の具体的な学び方などは見えてこない。
3. TAEのような質的研究では、今回のように、一人一人から個別の文脈に則した情報を得られる。

主たる引用文献

- 得丸さと子.(2010).『ステップ式質的研究法—TAEの理論と応用』. 東京: 海鳴社.